変化の時代、業界の未来と可能性

2022年は、コロナ禍の影響や国内外での社会情勢不安により、人々の価値観が大きく変化した年となった。我々の価値観の変化は生活のあり方のみならず、社会的なニーズの変化も生み出し、建築業界においても大きなうねりとして影響を及ぼしつつある。

そこで、2023年新年号では新春鼎談として、左官、タイル、煉瓦の各分野において輝きを放ち、業界をリードしている久住有生氏、白石普氏、髙山登志彦氏の3名のカリスマ職人にご出席をいただき、「変化の時代、業界の未来と可能性」をテーマに各業界について普段の仕事の中で感じること、その課題と可能性について意見を交わしていただくことで、業界の未来を探った。

（編集部）

◆出　席　者◆

久　住　有　生（左官株式会社 代表取締役　親方）

髙　山　登志彦（株式会社 髙山煉瓦建築デザイン 代表取締役）

白　石　　普（株式会社Euclid 代表　タイル職人）

令和4年12月12日収録　於　学士会館

久住　有生（くすみ・なおき）

左官株式会社 代表取締役　親方

祖父の代から続く左官の家に生まれ、３歳で初めて鏝を握る。「世界を観てこい」という父の勧めで渡欧し、アントニ・ガウディの建築を目の当たりにして左官職人を目指す。重要文化財などの歴史的価値の高い建築物の修復ができる左官職人として、国内だけにとどまらず、海外からのオファーも多く、その技術と実績は業界でもカリスマ職人と称されている。また、現場では企画段階から参加することが多く、デザイン提案なども積極的に行っており、伝統的な左官技術とオリジナティ溢れるアイデアで、商業施設や教育関連施設、個人邸の内装や外装を数多く手がけている。

髙山　登志彦（たかやま・としひこ）

株式会社 髙山煉瓦建築デザイン 代表取締役
山口県の高校を卒業後、資金を貯める目的で家業を手伝い、ホテル川久の煉瓦建築現場で感銘を受ける。その後、図書館建築のパイオニアと呼ばれた故・鬼頭梓氏から声をかけられ職人になる決心をした。民間公共工事他、国内に現存する煉瓦建築の保存改修に携わる一方で、新しい建築に融合させながら煉瓦が持っている素材、構造、デザイン等の無限の可能性を追求。プロジェクト計画段階からクライアントや建築家と一緒に取り組み、デザイン提案から材料焼成、施工まで一貫して行う事を理念とし、時に煉瓦彫刻等のアートも手がけている。代表作は横浜赤レンガ倉庫保存改修工事、馬事公苑 VIP エントランス、田根剛設計・弘前れんが倉庫美術館等

本日はお忙しいところ弊誌の新春鼎談企画にご出席を賜り、誠に有難うございます。今回は「変化の時代、業界の未来」ということで左官、煉瓦、タイルのカリスマ職人にお集まり頂き、業種を超えて未来に向けての提言などを伺えればと思っております。まずは、皆さんご承知かもしれませんが、ご自身が業界に入ったキッカケと仕事の魅力についてお話頂ければと思います。最初は左官から久住さんお願いします。

久住：ここにいるみんな知っていると思いますが、3代続く左官屋です。物心がつく頃から壁を塗る練習をしないとご飯を食べさせてもらえなかった。小学生頃には現場にも連れて行かされて、鏝で仕上げるのはもちろん、漆喰装飾のレリーフまでやりました。そういうスパルタが積み重なって左官が嫌で、高校時代のケーキ屋さんのアルバイトがキッカケで将来はケーキ屋になる為に専門学校に入ろうと思っていました。それを父に話したら駄目だと。専門学校の学費の代わりに旅費をやるから欧州を旅してこいと。その時、ガウディやケルン大聖堂、ルーブル宮殿といった有名建築を見て左官にも少しは興味が出てきた。それでもケーキ屋になる夢は諦めてはいなかったけれど「ケーキは食べたらなくなるけれど、左官は死んでも残るで」という父の一言で。今にして思えば子供だましかもしれませんが、左官になろうと決めました。

白石　普（しらいし・あまね）

株式会社 Euclid 代表
芸術一家に生まれ育ち幼少より美術、芸術に親しむ。20歳のときに 1年間イタリア・ギリシャ各地を歴遊、ローマ遺跡やビザンチン建築に興味を持ちタイル職人となる。のちイスラムの幾何学モザイクに魅せられモロッコ・フェズのモザイク工房で 2 年間修行、モスク建設などに携わる。現場では企画から参加し、デザイン提案、タイル制作そして施工を一貫し、装飾にこだわるタイル職人として業界にその名を轟かせている。また、セミナーやイベント開催などタイルの未来を切り拓く活動を積極的に行っている。最新作は、愛・地球博記念公園ジブリパークの「ジブリの大倉庫」中央階段